



Title	2011年・2020年
Author(s)	菱田, 伊駒
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81436
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2011 年・2020 年

石橋商店街 タローパン勤務

菱田伊駒

普段、大阪の端っこにある、街角の小さなパン屋で働いている。朝 5 時頃から始まる仕込みの作業が終わり、8 時頃になると店に並べるサンドイッチ類を調理するために、パートたちが出勤してくる。パートたちは子育て中の人が多い。話題といえばもっぱら子どもたちの様子や、最近買ったペットの話、近所の美味しいカフェについてだ。昨年(2020 年)の 2 月頃から、そんな話題とは少し雰囲気の違う「オーバーシュート」とか「クラスター」とかいふ言葉が飛び交うことが多くなった。

そんな時、思い出されたのは 2011 年のことだった。当時僕は大学生で、話題といえば多くの場合、最近見たアニメや友達と遊びに行った場所のことだった。それが、「メルトダウン」とか「○ミリシーベルト」とか、たくさんのカタカナ用語が身の回りに急に溢れ出したのだった。しかし、それも一時のことで、数か月もすれば、また元の話題に戻っていくのだった。

今回についていえば、この原稿を書いているのはもう 2021 年の 2 月で、丸 1 年が経つが、未だにカタカナ用語は多い。少し違うことといえば、昨年以前は耳慣れなかった「三密」とか「オンライン」という言葉は、口にすると妙な違和感があったが今はない。それだけこの 1 年、この言葉を発した証拠だろう。カタカナ用語は多くとも、話題のほとんどは元に戻っている。

2011 年にせよ 2020 年にせよ、こうやって「元に戻る力」が人にはあり、それがあるので生きていけるのだと思う。それが現在進行中の危機のさなかであっても、だ(こういうことを考えると、坂口安吾(1906～1955 年)が『墮落論』(1946 年)で描いた「戦時中を不思議に面白おかしく生きる人々」のことを思い出す)。^{*}

しかし、どちらの時についても僕が興味を持っているのは、どうすれば元に戻らずに生きていけるのか、ということだ。

“ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず”

鴨長明(1155～1216 年)著『[方丈記](#)』(1212 年)**

という言葉があるが、果たしてそんな日々を送ることができているだろうか。泡沫の持つような美しさを持って生きているだろうか。そんなことを時々考えながら、2021 年を迎えている。

《林田注記》

* 有事の桃源郷と平事の修羅場を対照させた、爆発的ベストセラー作品『墮落論』を題材にして、菱田は平時の桃源郷、理想的なポスト・コロナ禍社会は到来するのかを考察中である。

** 林田は、疫病・戦火で荒れる国土・人心を背景とした「泡沫の水」の連想から、対照的にすぐにこの歌を思い出した：“袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん”紀貫之(866～945? 年)ほか撰『古今和歌集』(905 年)所収。

平時の珠玉の短歌は「石清水」に焦点をあて、あたかも現代的な SF 世界であるかのようおに、瞬時にして四季を潜り抜けるその面白さは圧倒的である。刹那的なうわべの美しさだけを賛美したものだろうか？

けれども平時、有事を問わず、国民皆保険を社会主義的制度として烙印を押し、導入しない WASP 米国の社会のコロナ禍惨状を見て、常に物欲まみれの投機商人は存在しているから、『墮落論』は対照性の妙を生かし、通時代的な永遠の命を宿した「流行作品」であるのかもしれない。



河岸都市・リスボン旧市街地の壁画：神話の大洋の色白美顔

女神テティスをモチーフに水の大切さをアピールしている。

(林田撮影：2019 年 3 月 14 日)



菱田が勤務しているパン屋の様子：大阪府北部，池田市，
石橋阪大前駅近くの「タローパン」。今年で創業 93 年目を迎える。

(菱田撮影：2021 年 2 月 12 日)